

もし英雄たちが交配実験されてしまったら！？

フォイアーエムブレムヒーローズ異種姦CG集

DEEPRISING

もし英雄たちが交配実験されてしまったら!?

CAUTION!

未成年の方の購入・閲覧を禁止します！
画像の無断転載・加工を禁止します！

Reprint is prohibited !

序章

ムスペル王国との戦いが終わり
一時の平穏が訪れた特務機関

アスク王国の王女シャロンは一人呆然と座り込んでいた

シャロン「はあ…私って役に立っているんでしょうか…。」

アスク王国の王女であり
特務機関創設時のメンバーの一人でもあるシャロン
兄アルフォンスや召喚士と共に最も重要なメンバーの
一人であるはずだったのだが…

シャロン「最近、全然出番がないんですよねえ…。
帝国との戦いの頃はまだ役に立っていた気がしますが
ムスペル王国との争いの間は…
ただ一緒にいただけのような気がします…。」

優秀で強力な英雄が多く揃ってきた特務機関内で
実力によるランキングをつけるとするなら
シャロンはかなり下位に位置する

シャロン「大体、英雄さん達が強すぎるんです…
召喚士様は英雄を召喚する大事な役目がありますし…
兄様は召喚士様の半身らしいですし…
私って…。」

強力な英雄たちが召喚される度に
だんだんと孤立していき役に立てなくなっている…
そんな想いが増していくばかりであった

唯一の拠り所でもある兄アルフォンスは
最近召喚士と、どちらが上半身下半身かなどと
冗談を言い合っており
シャロンが会話に入る隙がまるで無い

シャロン「はあ…もし私が英雄だったら…
もっとすごい大活躍ができたんでしょうか…？」

一人でぶつぶつと呟くシャロン…

その時…

シャロン「えっ…なんですかこの光…
私の体が…すごい光ってますっ!？」

突然、何の前兆もなく光り輝き出すシャロンの体
その輝きには覚えがあった

シャロン「これって…英雄さん達が召喚される時の光と同じ…!？
もしかして私…誰かに召喚されようとしているんですか…!？」

より輝きは強くなり…
シャロンの頭の中には誰かが…
自分を呼ぶ声が聞こえてくる
誰かはわからないがその声は
英雄達を…救いを求める叫びにも聞こえた
自分が英雄として認められ異界へと召喚されるという状況に

シャロン「私っ…英雄になれるんですかっ!？
行きますよっ!私、英雄になってあなたの力になります!」

テンションが爆上がりし即、異界行きを決断したシャロン
その体は完全に光に包まれ…ゆっくりと消えていった

シャロン「ああ…これが召喚される感覚…
何だかフワフワしてて癒されますっ…!
私の世界の方はしばらく大丈夫でしょう
強い英雄さんもたくさんいますし…。」

自分がいなくてもあの世界は問題ない…
口には出せなかったがシャロンはそれをよく理解していた

光の中で目を閉じ…
新たな世界で英雄として活躍することに胸が躍る
今までの自分とは違う…新たな自分を見つけ
元の世界でも活躍できるだけの力を身に付けようと
強く決意した

シャロンの体は無事に異界へとたどり着いた
大地を踏みしめる感覚が戻り
手に握る愛用の槍を力強く握りしめ

シャロン「はじめまして、あなたのシャロンです！
英雄としてあなたの力になりましょう！！」

第一印象が大事だと考えたシャロンは
満面の笑みで目の前にはいるはずの召喚士へと挨拶した

シャロン「……あれ？」

しかし…シャロンの目の前には誰の姿もなく
周囲は静寂で包まれていた

シャロン「想像と違いました…あれ？
なぜ召喚士様がないんでしょうか…??」

キョロキョロと周囲を見渡すシャロン

そこにはシャロン以外にも大勢の英雄たちの姿があった
召喚されたばかりらしく彼らも状況が理解できていないらしい

シャロン「こんなに大勢を召喚できるなんて…
すごい力を持った召喚士様なんですね、きっと…
でも姿が見えないのはどういうことでしょうか…？」

召喚の台座から降りたその時…
シャロンは目の前で倒れたまま微動だにしていない
召喚士らしき人物の姿に気付いた…

シャロン「召喚士…様っ！？
一体何があったんですか…もう泥だらけで血塗れで…
ボロボロじゃないですかっ！？」

慌てて駆け寄ったシャロンと周囲の英雄達…
しかし召喚士は既に事切れており
英雄達の言葉に応えることはなかった…
衣服はボロボロになっており
体はかなりやせ細っているように見える
かなり厳しい状況に置かれていたことが想像できた

「こ…この手紙は…？」

召喚士の懐から見つかったのは…
英雄達へと向けられた手紙だった…

シャロン「召喚士様からの手紙…一体何が書かれて…。」

私が最期力で召喚した英雄達よ…
こんな異界へと召喚してしまったことを許して欲しい
この異界は墮落した女神たちにより闇に染まりつつある
特務機関は既に崩壊し…希望は少ない…
だが…

シャロン「えっ…！？」

その手紙の冒頭を読んだだけで英雄たちの顔が強張った…
想像を超えたとんでもない異界へと
召喚されてしまったことを理解してしまったのだ

シャロン「特務機関が崩壊…って…
そんな、私どうなっちゃうんですかあっ！？」

1章

英雄として異世界へと召喚されたシャロン
ようやく自分にも大活躍のチャンスが訪れたと思っていたら
召喚された先の異界は既に特務機関が壊滅…
召喚士も目の前で死んでいた
この異界で何が起きているのか…
その真相を探ために英雄たちは行動を開始する

マルス「みんな集まったね、
じゃあこれからの行動について相談を始めようか。」

異界へと召喚された英雄達の中心となっているのは
英雄王マルス…
アカネイア大陸の英雄であり
もはや説明がいらぬほど名の知られた
英雄の中の英雄である

召喚された英雄たちの中でもすぐに中心となり
彼らを導こうとする姿はまさに英雄王に相応しい姿だった

ルキナ「まずは状況の把握ですね…
この手紙には特務機関が崩壊した以上のことは
書かれていませんし…。」

エイル「気になるのは…この女神という言葉ですね…。」

手紙に記されていた邪悪な女神の存在…

この女神の存在が特務機関の壊滅に大きく関わって
いることは間違いないだろう

この異界に漂う邪悪な力もおそらくは
その女神の影響だと考えられる

マルス「女神というのが僕たちが知る存在と同じなのか…
全く別の存在なのかわからない、
だからこそ今は慎重に行動すべきだろう…
幸いにも僕たちには英雄の仲間たちがいる！」

マルスを中心に集まる異界の英雄達…

英雄王マルス ルキナ

エレブ大陸の英雄…

イドウン スー テイト

テリウス大陸のラグズ…

レテ リアーネ

そしてシャロンと同じ異界…ヘル王国の王女…

エイル

そしてシャロン…

シャロン「私の出番が…ありません…。」

骸となった召喚士の埋葬を終えた英雄達…

この異界の召喚士が一体どんな人物だったのか

何も知らなかったが

最後の力で英雄たちを召喚し

未来へと希望を残す手紙を用意していたことを考えると

この世界を何とか救おうとしていたのは間違いないだろう

そんな事を考え改めて決意を固める英雄たちは行動を開始した

英雄達は数人ずつに分かれ周囲の偵察へと向かった

・召喚の台座近くの街の偵察…

・特務機関の砦の偵察

・アスク王国、王都の偵察…

特務機関が崩壊したと手紙には記されていたが
強力な力を持つ英雄たちが敗北したとは思えない
生き残った英雄たちの搜索も同時に行う事となった

その翌日…

十分に休息を取った英雄たちは行動を開始する

王女シャロンは自分の祖国であるアスク王国の王都偵察の
リーダーとして英雄たちを率いることになった
念願の英雄として活躍するチャンスが訪れたはずなのだが

シャロンの顔はどこか浮かない様子であった
リーダーに任命されたのも
王都周辺に詳しいということがその理由であり
英雄としての力を認められたわけでは無い

シャロン「おかしいです…
私が想像していた英雄の扱いとはだいぶ差があります…。
でも仕方ないですよ…特務機関が崩壊していたなんて…
お兄様は無事なんではないでしょうか…？
というかこっちの私は…どうなったんでしょうか…！？」

ぶつぶつと独り言をつぶやくシャロンの背後には
二人の英雄たちの姿があった

クトラ族長の娘 「スー」と
イリア天馬騎士団の騎士 「ティト」

スー「ティト…シャロンは先ほどからどうしたのだろう…。」

ティト「特務機関が崩壊したのです、
兄の行方も分からないのですから…不安なのでしょう。」

スー「そうか…たしかにそうだな…
今は温かく見守るとしよう…。」

他の英雄達とは明らかに様子が違うシャロンを
心配する二人…

ティト「私も正直…少し不安ではあります。」

スー「…私もだ、まさか異界がこんなことになっているとは。」

二人が見上げた空…
その先は黒い雲に覆われており
これだけ距離が離れていても邪悪な気配が感じられた
あの雲の下に何かがいる…
邪悪な女神なのか…それ以上の存在か解らないが

今の自分たちでは太刀打ちできない強大な敵であることは
間違いなかった

スー「私たちだけでは力が足りない…
もっと多くの英雄たちの力が必要になる。」

ティト「ええ、その為にも少しでも早く偵察を終えて
英雄達の搜索を始めるべきですね。」

シャロン「任せてくださいっ！
私がちゃんと案内してますから
王都にはすぐ着いちゃいますよ！」

スー「そ、そうか…頼もしい限りだ。」

ティト「シャロン様…あまり大きな声を出されると…
どこに敵が潜んで…」

シャロン「では少し急ぎましょうか！
送れないでついてきてくださいね！」

英雄として役目を果たそうと張り切るシャロン
王都までは急いでもまだ数日はかかる…
背後の二人は既に疲れたような表情を浮かべていた

ガサガサ…

シャロンが軽快に歩き出した時…
周囲の森の中で何かが動いた

「「「！？」」」

シャロン スー テイトの3人はすぐに武器を構え
ガサガサと動いた森の中へと意識を集中させる

お調子者だったシャロンもすぐに臨戦態勢を整え
周囲を警戒し始めていた

静まり返った森の奥から何かが近づいてくる…
武器をより強く握りしめ迫る何者かへと攻撃しようとした時…

シャロン「あの人は…！？」

シャロンの声は驚きに満ちたものだった

テイト「お知り合いですか？」

シャロン「はい、敵ではありません！英雄さんです！」

森の奥から姿を見せたのは…

異界の英雄「フローラ」と「ジェニー」であった
行楽中らしい服装に身を包んだ二人の姿に一瞬戸惑った
シャロンたちだが
怯えた様子の二人の姿を見てすぐに駆け寄った

シャロン「フローラさんにジェニーさんっ、大丈夫ですか!？」

フローラ「シャロンさんなぜここにっ！」

シャロンを見て明らかに警戒している二人

ジェニー「ちょっと…雰囲気が違う気もする…なぜ？」

フローラ「そうですね…穏やかというか…

抜けているというか…

いつものシャロンさんの色気がありませんね…。」

シャロン「…こっちの私ってどういう私なんですか…？」

ジェニー「こっちの私…？」

フローラ「それはどういう…意味でしょうか？」

シャロン「それはですねっ！

私は英雄として異界から召喚されてきたシャロンなのです！」

小さな胸を張るシャロン

その様子からこのシャロンが異界のシャロンであることを理解したフローラとジェニー

フローラ「異界のシャロンさんでしたか…それなら納得です！」

ジェニー「うん、もう別人だもん…。」

シャロン「なんですかそれっ!？」

私をそんな目で見ないでくださいっ！」

スー「私もぜひこっちのシャロン殿に会ってみたいものだ。」

ティト「私もです…すごく気になりますね。」

シャロン「お二人まで…何なんですかあっ！」

…

フローラ「それより早くこの場を離れないと…
追手が迫っています！」

スー「追手だと…一体何者だ？」

フローラ「女神が異界から召喚してきた魔物たちです…
奴らの目的は…私たちのような英雄の女です！」

怯え…興奮し話し出すフローラ…
ジェニーも同様に怯えた様子を見せていた

ティト「…なんだかよく解らないのですが…
ひとまず召喚の台座まで二人を連れて行きましょう、
詳細は後でじっくり聞くとして…。」

シャロン「了解です！では急いで戻りましょう！」

フローラ、ジェニーと共に
仲間たちの元へと引き換えそうとするシャロン一行…

だが…

その行く手を遮るように何匹もの
人型の魔物が姿を現したのであった

シャロン「あれはっ！？…なんでしょう…？」

見たことのない魔物の姿に戸惑うシャロン達

ジェニー「あわわ…っ…そんなっ…。」

フローラ「厄介な奴らに見つかってしまいました…
あれは「ゴブリン」と呼ばれる魔物です…。」

スー「ゴブリンっ！？聞いたこともない魔物だ…。」

ティト「そんなに強そうには見えませんが…。」

フローラ「どこかの異界では非常に有名な魔物らしいです
冒険者の女性をさらって…繁殖の為に利用するのだとか…。」

シャロン「英雄の女が目的って…
まさかそういうコトを…するためにですかっ！？」

フローラとジェニーの顔は既に青ざめていた

そしてその話を聞いたシャロンとスー
ティトの顔も次第に青ざめていく…

…

5人はゴブリン達の包囲を突破しようと駆け出した

英雄として十分な力量を持つ5人は
次々にゴブリン達を倒しその包囲から抜け出そうとするが

スー「なんだ…一体どれだけいるんだ！？」

ティト「次から次へと…湧いてきます！」

一体どれだけの数が森に潜んでいるのだろうか
5人の周囲を取り囲むように常に10匹以上のゴブリンが集まり
何匹倒そうともすぐに森から新手が出現する

シャロン「なっ…何なんですかコイツはっ!？」

ゴブリンを倒したシャロンの前に
明らかに姿の異なる魔物が出現した

ゴブリンよりも大柄な体格をした豚鼻の魔物「オーク」である

どこかの異界では有名な魔物の1つであったが
シャロン達には知る由もない

シャロン「きゃあああっ!？」

オークに腕を掴まれ引き寄せられていくシャロン

仲間たちが声を上げシャロンを助けようとするが
必死に抵抗するシャロンにその声は届かない…

シャロン「ひああああっ!？」

オークはシャロンを引き寄せると手に持っていたナイフで
一気にシャロンの服を切り裂いた
白い肌と小振りな乳房が一気に露わになる

オークはすぐにシャロンの乳房を撫でまわし…
さらに舌を伸ばしじっくりと味わうように舐め回していた

シャロン「いやあっ、そこはだめええ!!」

さらにオークはシャロンの下着にまで手をかけ
一気にずり下ろす…
そこにもう一体のオークが近づき
シャロンの秘部を音を立てて愛撫し始めた

シャロン「うっ…あああああっ…舌が奥まで…はいって…
私っ…英雄なのにつ…!？」

全身をビクビクと震わせ悶えるシャロン…

そして…

シャロンの体を舐め回し終わると…
オークたちはギンギンに反り立った肉棒を秘部…
そして尻穴へと押し当てグイグイとねじ込み
挿入させてきたのだった

シャロン「あがあああっ!？ ひああああっ!!」



スー、テイト…フローラ、ジェニーの目の前で犯されるシャロン

全身に激しく電気が走るかのように激痛が響き
肉棒が一気に膣内の奥深くまで入り込んできた

英雄との交尾を目的としているオークはすぐに
激しく腰を振りはじめシャロンの体を大きく揺さぶる

シャロン「ああああああああああっっっ!??」

その様子に呆然としてしまうスーとテイト…

そして怯えるフローラとジェニー
二人はこのような光景を何度も目撃してきており
次にああなるのは自分たちであることを知っていた

ほんの数時間前…森の中で…

フローラ「あっ…あああ、いやっ…もう許してっ…！」



だめ…これ以上は…!
ああ…いや、おかしくなっちゃうっ!?

ジェニー「ふええっ…いっ いやあああっ！」



ううっ…いやっ…やめてっ！
奥に入ってきてるよおっ…!!

森へと逃げ込んだ二人へと襲い掛かったのは…
付近の村に住む男たち…

男たちは英雄である二人を容赦なく犯し
その性欲を満たした

何度も弄ばれた後隙を見て逃げ出した二人は
偶然にもシャロン達と出会い…今に至る…

既に心が折れている二人は戦力としては全く頼りにならず
今もスーとティトの背後で怯え震えているだけである

二人を必死に守り続けていたスーとティトだったが…
シャロンがオークへと捕まったことで隙が生まれてしまう

実力としては二人に及ばないシャロンだが
彼女が抜けた穴は大きい…

二人は一気に迫るゴブリン達を捌ききれず
数で押され…強引に押し倒されてしまった

…

スー「うっ…離せえっ…!!？」

ティト「いやっ…触らないでえ！」

背後から尻を撫でまわされるスー

形の良い大き目の尻をゴブリンは不気味な笑みを浮かべて
揉みまわし…舌で舐め回す…

押し倒されたティトは服を引き裂かれ
露わになった乳房を舐め回され乳首を弄ばれる

その奥ではシャロンが今も激しくオークに揺さぶられ
交尾が続いていた

シャロン「はああああっああんっ！！？」

スー「いやあっ…そこは…ダメだっ！？」



下着を剥がれ露わになった秘部に肉棒を押し当てるゴブリン
性欲を抑えきれない様子ですぐに肉棒を挿入させた

スー「うぐっ…あああ 痛っ…!??」

強引に膣内へと押し込まれた肉棒
激しい苦痛に顔を歪めるスー…

ティト「や…やめて…スーにひどい事をしないでっ!!」

必死に犯されるスーを助けようとするティトだが
彼女にもゴブリンの肉棒が迫っていた

ティト「うっ…あがあっ!??」



ティトを襲っていたゴブリンも本能のまま
肉棒をティトの膣内へと挿入させ
激しく腰を振り始める…

ティト「あはあああ…いやあああああっ！！」

森の広場で激しく繰り広げられる酒池肉林…

フローラやジェニーもゴブリン達に囲まれており
もはや彼女たち全員に逃げ道などなかった

スー「うっあっ…うあああっ…！？」

ティト「ひっ…ぐうっ…ううっ…！！??」

ゴブリンに押し倒され犯される英雄達…
必死に歯を食いしばり苦痛に耐えるスーとティトだったが

魔物に犯されているという耐えがたい現実
涙があふれて止まらない

ゴブリン達は二人の体を気遣うようなことはせず
ただひたすら全力で腰を振り肉棒を根元まで挿入させる

喘ぎ苦痛に悶える英雄達…

そんな中オークに二穴同時に挿入され犯されていたシャロン
は限界に達しようとしていた

シャロン「あああっ…だめっ…どうしてっ頭がおかしく…
なって何も考えられないっ…!？」

肉棒を挿入されてまだ数分…
苦痛しか感じられなかった体の奥に新たな感覚が生まれ始める

シャロン「あはっ…き…気持ちいいっ…っ…!？」

体が熱くなり呼吸も激しくなる…
愛液が大量に溢れ肌がぶつかり合う度に激しく飛び散る

今までに無い感覚に支配され頭の中が真っ白になったシャロンは

いつの間にかうっとりとした表情で
必死にオークにしがみ付き交尾を受け入れ始めていた…

シャロン「あっ…はああああああああんっ!!??」



大量にオークの精液が射精されると同時に
絶頂を迎え大量に潮を噴き上げたシャロン…

ぐったりと体から力が抜けそのまま意識を失っていた

その表情は何とも言えない幸福感に満ちているようだった

スー「うっ、シャロン…っ!？」

ティト「あああ、シャロンさん…!？」

目の前で中出しされ白目を向いてしまったシャロンの姿に
衝撃を受けた二人…

今も自分の目の前で必死に腰を振るゴブリンたち…

その息遣いや臭い息…鼓動まで感じられるほどに密着していた

そんな状況に不思議なほどに興奮しているスーとティト
体が熱くなり、膣内で暴れる肉棒の形がハッキリと感じ取れる

ティト「な…なにかおかしいですっ…私…初めてなのにっ…!？」

処女であるはずの自分の体が不思議な程に
肉棒を受け入れてしまっている…

それは隣で犯されているスーも同様らしく

スー「あっ…あああああああ！???」

激しい声を上げて潮を噴き上げていた

スー「だ…だめだっ…激しくてっ…あああっ…
中に…熱いのが…出てるっ!!!」



全身を痙攣させ中出しされるスー…
初めての射精を膣内の奥深くで受け
その激しい刺激に耐え切れずぐったりと倒れ込んだ
全身から完全に力が抜けたのか
尿を漏らし大きな染みを作っていた

ティト「あはああああ、私の中にも…出てるっ!？」



ティトの膣内で大量の射精された精液
スーやシャロン以上に全身を激しく震わせ悶えるティト

射精と同時に大量の潮を噴き上げ
必死にゴブリンの体へとしがみ付いていた

ティト「あっ…あがっ…ああああ…!？」

秘部から精液を溢れさせ放心するティト…

隣にはスー…シャロンと続く

そしてその周囲には順番を待つように並んだ
ゴブリンとオークの群れ…

魔物たちの宴はまだ始まったばかりだった…

…

2章

シャロン達がゴブリン達に襲われている頃…

ルキナ率いるチーム

ガリア王国の女戦士 レテと

既に滅びた鷲の民セリノス王国の王女 リアーネ

二人ともラグズと呼ばれる獣人種であり
獣の姿へと変身することができる

彼女たち3人は既に崩壊したと記されていた
特務機関の砦の様子を探ることが目的である

レテ「…ルキナ殿、我々はなぜ砦へと向かっているのだ
既に特務機関は崩壊したと聞いているのだが？」

ルキナ「シャロン王女の話しによりますと、
砦の奥には装備や物資が隠して保存されているらしいです。
少数とはいえ私たちもそれなりに数がありますから
様々な物資が必要になります。」

レテ「なるほど…その回収に向かうというわけだな。」

ルキナ「はい、あとは砦の状況の確認ですね
もしまだ砦として使えるのであれば
うまく利用していくべきでしょう。」

レテ「たしかに私たちには拠点となる場所が必要だな。
リアーネ様も安心して休ませてあげたい…。」

リアーネ『?????????』

ルキナ「…リアーネ様は古代語…？を話されるのでしたね。
レテさん…リアーネさんは今何と仰ったのですか？」

レテ「…いや、私も古代語はサッパリで…。」

リアーネの故郷セリノス王国では古代語が標準語であった
そしてリアーネは長い間森の中で眠り続けていた為に
レテ達が話している「現代語」を学ぶ機会が無かった…

リアーネには兄の「リュシオン」など
同族で現代語を既に習得した者もいるのだが
残念ながら彼は召喚されていないようだった

同じラグズとして、
レテはリアーネに付き添い守ることを決めていたが…
言葉の壁は大きく意思疎通が難しい

リアーネもそのことをよく理解しているのだろう…
大袈裟に身振り手振りし理解し合いたいと必死であった

ルキナ「リアーネさん、疲れたなら無理しないでくださいね。」

リアーネ(ありがとうございます、
でも今は休んでいる時ではありません…迅速に行動するべきです。)

レテ「心配はいらないぞ、いざとなったら私が背負って進むから。」

リアーネ(いえ、それは恥ずかしいので嫌です…。)

遠慮するように丁寧に頭を下げたリアーネ…

ルキナ達はリアーネの古代語を理解できないが
リアーネは現代語を聞き取ることはできる
ルキナ達には解らなかったが古代語と現代語で
しっかりと会話は成り立っていた

ルキナ「やはり疲れているようですね…。」

レテ「よし、リアーネ様…さあ私の背に！」

頭を下げる動作を「お願いします」と勘違いしたレテは腰を落としリアーネを背負おうとしてきた

リアーネ(いえ、大丈夫ですからっ！
そんな気を使わないでください！)

ルキナ「背負われるのは嫌みたいですよ？」

レテ「そうなのですか…？」

必死に身振り手振りで会話しようとするリアーネ

レテ「そ…そんなに嫌なのですか…
リアーネ様申し訳ありませんでした…。」

動作が大袈裟すぎたのか、
レテにはリアーネがものすごく嫌がっているように見えたらしい

リアーネ(ああ…レテ様ごめんなさい…
私、早く現代語を話せるように努力します…。)

…

ルキナ「あれが特務機関の砦…ですね。」

レテ「何か…騒いでいるようだが…。」

リアーネ(お祭りでしょうか…歓声が聞こえます。)

3人が見つめる先には複数の人影があった

明らかに人間ではない怪物の姿も多数混ざっているようだが争っている様子はなく何かを見つめて騒いでいるようだった

リアーネ(一体何を騒いでいるのでしょうか?)

ルキナ「一体何を騒いでいるのでしょうか？」

レテ「ここからでは確認できないが、あの興奮は普通ではないな…。」

リアーネ(…ああ…まるで無視されているみたいです…
現代語を放せないことがこんな苦痛になるなんて…
お兄様はいったいどこにいますのでしょうか…?)

レテ「リアーネ様…不安なのですね
心配はいりません、私が守ってみせます！」

ルキナ「ではリアーネ様はここで…私たちが様子を見てきましょう。」

リアーネ(ええっ、嫌です！
こんなところで独りにしないでくださいっ！)

レテ「大丈夫です、ここに隠れていれば心配いりません。」

ルキナ「では行ってき…きゃあっ！？
リアーネ様そんなところ触らないでっ…！？」

一人森の中で眠り続けてきたリアーネにとって
再び森の中に一人で置きざりにされるというのは
大きなトラウマとなっていた

涙を浮かべて一緒に連れて行ってと懇願するリアーネ
ルキナとレテの体にしがみ付き決して離そうとしない
細身の体でこれだけの力が出せるとは…
と感心させられるルキナとレテ

泣き止まないリアーネを仕方なく連れて行く
一緒に行動することになり
リアーネは満足そうな表情を浮かべていたが
鷲の民であるリアーネには大きな白い翼があり
隠れて行動するには非常に目立ち
その美しい輝く髪と白い肌に白い服…
そうリアーネは全身全てが白かった

隠密に向かないリアーネを慎重に誘導し
騒いでいる魔物たちへと接近していった一行…

そこで見たのは…

ルキナ「あれは…たしかデューテさん…？」

ルキナは異界での記憶を辿り
魔物たちの中心にいる一人の少女のことを思い出した

レテ「知り合いか？」

ルキナ「ええ…たしかセリカ様と同じ異界からやってきた…。」

こんな魔物たちの間で少しも怯える様子が無いデューテ…
しかし…

デューテ「あっ…あああああっ!？」



どこからともなく現れた魔物「ビグル」が
デューテの体へと纏わりついた

レテ「なっ…!？」

ルキナ「何ですか…あれっ…。」

リアーネ(うわあ…っ…。)

服の隙間から入り込みデューテの体を愛撫し始めるビグル

デューテは喘ぎ声を上げ
体をくねらせ悶える…

その様子を周囲の男たちや魔物たちが興奮し見つめている

ルキナ「た…たすけないと…。」

レテ「あ、ああ…だがどうやって…あまり触りたくは…。」

ビグルのウネウネした動きに嫌悪感を抱き
鳥肌が収まらないレテ…
両手で肩を抱き怯えているようだった

デューテ「あはあああああっ!？」



3人が戸惑っている間に…デューテはビグルに弄ばれ
大量の潮を噴き上げてしまった

リアーネ(このままじゃ…私が敵の注意を引き付けます…
その間にあの子を助けてあげてください！)

そしてリアーネは美しい声で…歌い始めた

その美しさにルキナとレテだけではなく
魔物たちさえも魅了されていた

まるで力が抜けたようにその場に膝をついていく魔物たち
鷺の民の歌声は低位の魔物たちにとって
ただの歌ではなく戦意を削ぐ浄化の歌であった

ルキナ「……一体何が…？」

レテ「これが鷺の民の力か…ルキナ殿…今のうちに！」

ルキナ「あっ、わかりましたっ！」

ルキナとレテはすぐに駆け出し
ビクビクと痙攣していたデューテの体を担ぎ上げ
勢いよく走り出しその場から逃げ出していった

???「今のって…英雄さん達じゃないですかっ！
まだ無事な英雄さんがいたんですか…？
そんなはずは…まさか召喚士様が…？
これは女神さまたちに報告ですねっ！」

森の中で…

ルキナ「ふう…何とか救出できましたね！
デューテさん大丈夫ですか？
何か体に異常はありませんか？」

デューテ「どうして僕を助けたの…？」

レテ「当然だろう…同じ英雄同士なのだ。」

ルキナ「それに女の子があんなひどい
目に合うのを放っておくことなどできません！」

デューテ「余計なことを…僕の楽しみを邪魔して…。」

リアーネ(……………)

小さく呟いたデューテの声をリアーネだけが聞き取っていた
そして一見すると少女の姿のデューテ
しかしその体から溢れる異常なほど邪悪な気配…
鷲の民であるリアーネしかその闇に気づいていない

リアーネ(ルキナさん、レテさん…このデューテさんは危険です！
この子の中には深い闇が潜んでいます！)

ルキナ「ええ、リアーネ様！
先程の歌声は素晴らしかったです！」

レテ「さすが鷲の民ですね、あんな綺麗な声…
今まで聞いたことがありません。」

リアーネ(いえ、そうではなくて…
デューテさんが危険だと言っているのです…！
見て下さい、あの体から溢れる禍々しいオーラを…
…あれは…皆さんには見えないのでしょうか？)

デューテ「ええ、わかりました…うまくやります。」
皆さん、助けてくれてありがとう…
私の仲間が隠れてますので…一緒に来ていただけますか？」

何者かの指令を受けたかのように態度が豹変し
笑顔を浮かべるデューテ…
その姿に恐怖を感じリアーネは一步後ろへと下がってしまう

ルキナ「他にも無事な英雄さんがいるのですか！
急いで合流するべきですね！」

レテ「ああ、追手がくるかもしれない…急いだほうがいい…
っ…リアーネ様、先程から何ですか？
尻尾を引っ張らないでください。」

リアーネ(行ってはいけません！これは罠です！
デューテさんは何者かに操られているかもしれないです！)

必死にデューテの危険を訴えるリアーネだが…

ルキナ「また一人にされるのではないかと不安なのですね
心配いりません、置いて行ったりしませんよ。」

レテ「そういうことか…
リアーネ様はどこか子供のようなところがあるからなあ。」

リアーネ(そうではないのです！
ああ、もう一体どうしたらっ…。)

必死に訴えるリアーネだったが
言葉の壁は大きく
ルキナ達はデューテの案内するままに
森の奥へとやってきていた

レテ「何か…嫌な気配がする…本当にここに英雄が？」

ルキナ「……邪悪な気配を感じますね…それも複数…。」

森の中に何かが潜んでいることを察知した二人…

デューテ「気付くのが遅い…もう手遅れだよ？」

先頭を歩いていたデューテが不敵な笑みを浮かべて
森の中へと消えていく

3人は周囲から迫る気配を警戒する

???「本当に英雄さんたちがいるなんて…驚きました！」

ルキナ「えっ…あなたは…?!」

レテ「シャロン殿…っ…なんて格好をしているんだっ!？」

リアーネ(シャロン様…すごい…いろいろ見えています!)

3人の目の前に現れたのは…アスク王国の王女シャロン

だが、その様子は以前のシャロンとはまるで別人であった

かなり際どい衣装を纏い尻はほぼ丸出し…
胸はぎりぎり乳首が隠れているという程度で
ルキナ達が知るシャロンなら絶対に拒否するであろう
卑猥な姿を堂々と見せつけていた

ルキナ「あなたは…別人ですね…
もしかしてこの世界のシャロン王女…ですか？」

シャロン「さすがルキナさん、正解です！
私はこの世界の闇墜ちしちやったシャロンです！」

胸を張り小振りな胸を精一杯に張るシャロンの姿…
服装こそ別人であったがその性格は
普通のシャロンと変わりないように思えた

レテ「闇墜ちしたなど自分で堂々と言う事か…？」

ルキナ「シャロンさん！どうか私たちに力を貸してください！
このままではこの異界は取り返しがつかない事態へと
陥ってしまいます！」

シャロンに僅かでも
善良な心が残っているかもしれないと感じたルキナは
シャロンを説得しようと試みた

シャロン「もうすでに手遅れですよルキナさん！
この世界は女神さまによって
新たな世界へと生まれ変わろうとしています！」

ルキナ「新たな世界…それは…
こんな魔物に女性が弄ばれる世界のことですか！？」

シャロン「今はまだ混乱している人もいるみたいですけど
その先に待っているのは種族間の差別が無い素敵の世界です！
そのために私たちががんばらないといけないのですよ！」

レテ「綺麗事にしか聞こえないな…
本当に差別など無くせると思っているのか？」

ガリア人は半獣として人間達から差別されてきた歴史がある
ラグズに対して友好的な人々も多いことはわかっているが
それでも差別が完全に無くなる世界など信じられない

シャロン「大丈夫です！すべての種族が交われば…
その問題も解決するのです！
私も英雄さん達とたくさん交わり優れた子孫を残しますよ！」

シャロンの言葉を聞いて呆然とするルキナたち

この世界では今多くの種族たちにより
様々な交配が行われているという…
普通の間人では耐えられないが
英雄達の肉体であればそれが可能となり
新たな種族が誕生する可能性があるのだと…シャロンは力説した

頬を染め体をくねらせて
今まで多くの英雄達と交わってきたことを話しだすシャロン…

リアーネ（…交配なんて…そんなこと女神が許すわけ…。）

レテ「リアーネ様下がってください…
この場は…引くしかありません！」

ルキナ「ええ…この事態を早く皆に伝えないと…！」

3人は一斉に走り出す
行く手を遮るように魔物たちが姿を見せるが…
リアーネの歌声で怯んだ隙に突破しようとした

だが…

ルキナ「えっ…！？」

怯んだかに見えた魔物たちはすぐに立ち直り
ルキナ達へと飛びかかってきたのだった

レテ「なぜっ…リアーネ様の歌の効果が…？」

リアーネ(あの魔物たちは…先ほどの魔物とは格が違います…。)

シャロン「その魔物たちは特別なのです！
英雄さんたちの血を受け継いだ半英雄の魔物さんたちなのです！」

ルキナ「そ…そんなことがっ!？」

ルキナ達の想像よりも事態は深刻であった…
既に英雄達の血を継いだ新種族が誕生している
シャロンの「手遅れ」という言葉の意味を理解した

シャロン「ところで…
召喚士様は一体どこにいるのか教えてもらえませんか？
私…召喚士様との間に子供が欲しいので
ずっと探していたんです！」

新たにこの異界へとやってきた英雄達…
それは間違いなく召喚士が呼び寄せたに違いない

ルキナ「それを私たちが教えるだけでも…？」

シャロン「やっぱり簡単には行きませんよね…
でも私はルキナさんたちの弱点を知っていますので…
気持ちよくして白状させちゃいましょう！」

レテ「なんだと…!？」

リアーネ(!!??)

シャロンの合図と共に群れの中から歩み出した魔物…

ルキナの前には巨大な肉棒を反り立たせた馬の獣人…

リアーネの前にはノスフェラトゥ…

レテの前には…全裸の男が立ちふさがった

レテ「な…なぜ私の前にはこんなただの男なのだ…!？」

目の前で肉棒を反り立たせる男に
嫌悪感と激しい怒りを抑えきれないレテ

シャロン「レテさんは意外と快樂に強いので
別の手段で白状させます!

こういった、ただの男に弄ばれるのが一番屈辱的だと…

こっちの世界のレテさんが言っていました!

ちなみにこの男は英雄の血は引いていないただのおじさんです!」

レテ「こっちの世界の私め…許さんっ!」

怒りに燃えるレテと

リアーネを庇うように剣を抜いたルキナ…

そんな3人へと魔物と男は一気に襲い掛かった…

ルキナ「くっ…強いっ!？」

馬の獣人とノスフェラトゥを相手するルキナ…

リアーネの歌声で補助を得るが…分が悪い

シャロンの言っていた英雄の血を引いているというのも
信じたくはないが嘘ではないかもしれない…

レテ「いやああっっ!？」

レテは全裸の男に追い回されたただ必死に逃げ回っていた

獣化する隙も与えられずに
追い回される姿は何とも哀れな姿であった

リアーネ(きゃああああっ!?)

ルキナ「え、リアーネ様っ!？」

背後で守っていたはずのリアーネの悲鳴
言葉が通じなくとも悲鳴だけは理解できる

振り返るとそこには…もう一体のノスフェラトゥに
拘束されたリアーネの姿があった

リアーネ(いやっ…離してっ…!?)

ひどく怯えた様子のリアーネ…

その様子を見て激高するルキナ…
追い回されていたレテもリアーネの姿を見て
助けようと駆け寄ったのだが

ルキナ「レテさん危ないっ!？」

レテ「あっ…がっ…!？」

もう一体のノスフェラトゥの一撃を受けたレテ
たいしたダメージではなかったが
バランスを崩し倒れ込んだ隙について
男が背後から覆いかぶさってくる

レテ「ああっ!?!いやっ離れるっ!?!？」

必死に暴れるレテとリアーネ…

その様子を見ていることしかできないルキナ…

シャロン「さあ、どうしますかルキナさん？」

闇墜ちシャロンはワクワクした様子でルキナの表情を伺う…

ルキナは観念したように瞳を閉じ…武器を投げ捨てた…

シャロン「潔いですね！さあ、みんな子作りに励んで下さい！」

リアーネ(あっ…あああああっ!?)

ノスフェラトゥに拘束されたリアーネは
そのままドレスを引き裂かれ下着を奪われると
秘部に肉棒を激しく擦り付けられた

リアーネ(ああっ…いや、汚いっ…だめっ!?)

抵抗し体をくねらせるリアーネだが
ノスフェラトゥの怪力の前では意味をなさない

さらにもう一本の肉棒はリアーネの乳房へ擦り付けられる

異臭が漂い顔を背けるリアーネ…
だが…刺激された秘部から次第に愛液が溢れ出し
ノスフェラトゥの肉棒と絡み合い…
肉棒はじわじわとリアーネの秘部へと挿入されていった

リアーネ(あああああああっ!???)



処女膜を貫き最深部にまで挿入された肉棒

リアーネはただ涙をながし歯を食いしばり苦痛に耐える

レテ「リアーネ様っ…やめる…こんなことっ!？」

必死に抵抗するレテ…だが
両手を拘束されたまま男に尻を撫でまわされ
尻尾の付け根を匠に愛撫される

レテ「ひっ…あああああああっっ!？」

そこはレテにとって最も触れられたくない敏感な場所
触れられれば全身から力が抜け抵抗する気力すらなくなる

この男はこの世界のレテが困う男の一人で
レテの体の敏感な場所を知り尽くしていた…
異界のレテを墮落させるのにこれ以上の人選は無いと言える

レテ「ふにゃあああああああっ!？」

普段は決して人前で出さないとろけるような声を出すレテ

こうなってしまっってはもはや一目など気にしている余裕もない
レテを男に弄ばれるまま喘ぎ続け…
秘部に肉棒が押し当てられても抵抗することなく
体を悶えさせ続けていた

レテ「にゃあああああっ!入ってきてるっ…にゃあっ!!!？」



うっ…あぐっ…!?
なぜだ…私が…人間相手に
感じているのか?
ううああああああっ!?

尻尾をぴんと立たせて叫ぶレテ
その姿は誇り高きガリア王国の戦士とはまるで違う
一人の女の姿だった

ルキナ「くっ…私を…どうする気ですかっ!？」

背後から馬の獣人に抱き着かれ乳房を揉まれているルキナ…
全身をビクつかせ悶える…
先程から全身を愛撫してくるこの魔物は…
なぜ自分の敏感な場所を知り尽くしているのだろうか…

不思議に思うと同時に全身に走る刺激に耐え切れず
喘いでしまうルキナ

シャロン「当然ですよ!この子たちはみんな、
この世界のルキナさんやリアーネさんたちの
お気に入りの子達ですからね、敏感な場所だけじゃなく
性癖まで知り尽くしてますよ！」

ルキナ「なっ…そんなの嘘ですっ!??」

この世界の自分って一体どんな女になってしまったのだろうか…
不安と同時に怒りまで込み上げてくる
だが…

ルキナ「あはああっ!？」

秘部を匠に刺激され力が抜けて崩れ落ちるルキナ

シャロン「さあ、ルキナさんもがんばってください！」

ルキナ「あっ…あああっ…。」

服を脱がされ秘部を丸出しにされたルキナ…
抵抗しようにも体が言う事を聞かない…
僅かに馬男に体を触られているだけなのに全身に力が入らない
触れられた指を僅かに動かされるだけで

ルキナ「ひあああっああっ!？」

ルキナは大きな喘ぎ声を上げる

ルキナ「あっ…いやっ…こんなの入らないっ…!？」

抵抗できないまま肉棒が秘部へと密着していく様子を見続ける
自分でも築かなかったが秘部はすでにぐっしりと濡れており
馬男の肉棒はすんなりとルキナの秘部へと侵入していった

ルキナ「うっ…ぎっ…ひああっ!??？」



処女である英雄たちの膣内を貫く肉棒…
だが…
彼女たちは皆苦しんでいる様子はなく
既に快楽を全身で受け入れようとしていた

シャロン「あれ…思ったより早いですね…堕ちるのが…。」

その様子を見守っていた闇墜ちシャロンも
キョトンとした顔をしていた

しかしそれは無理のないことであった

体の弱点を知り尽くした相手に責められれば
例え英雄といえども抵抗することなどできない

ルキナ「あっ…ああああっああああっ!？」

リアーネ(あはああああっああああんっ!?)

レテ「ひぐっ…んにゃああああっ!？」

今はただ激しく肉棒で突かれ続ける英雄達…
その顔はただうっとりとして快楽を受け入れており
抵抗する意思すら既に失われているようだった

そして英雄たちを襲う魔物や人間達もまた
3人が快楽を感じ悶えることに喜びを感じていた
彼らにとって英雄たちはいわゆる「ご主人様」であり
満足させなければいけない主である
だからこそ全力で彼女たちの体を攻め続けた

リアーネ(あああああっ…ダメです頭の中が真っ白に…！
あはあああああっ！！)

大量に潮を噴き上げたリアーネ
ぐったりと全身から力が抜け体をノスフェラトゥに預ける
交尾はそのまま続きリアーネは抱えられるようにして犯され続ける…

リアーネ(うううっ…あああああっああっ
中に…熱いのが…でてますうっ！？)



大量に射精され全身が熱くなるリアーネ
悶えるその姿も…鷲の民の美しさを保っていた

レテ「うにゃあああああっ!？」

男に激しい腰使いで攻められていたレテは
もはや野性に帰ったかのように鳴き続けるばかりだった
男はより一層はげしく腰を振り
耐え切れなくなったレテも潮を噴き上げる…

レテ「うあっ…ああああ…ああ…っ!??」

同時に大量に射精されレテは全身を痙攣させていた…



ルキナ「あああ、私はこんなところで…負けるわけには…!？」

極太の肉棒で犯され続けていたルキナも限界であった

言葉では必死に抵抗しているが
その瞳は白目を向きつつあり墮ちる寸前といった様子だ

その強い意志はまさに英雄に相応しいものであったが…
体は正反対に快楽に弱く何度も何度も潮を噴き上げ
その度に大きな喘ぎ声を漏らしている

ルキナ「ああああ…だめ…中には…出さないでっ…!」

馬男の鼻息が激しくなり射精が近くなると
ルキナは必死に許しを請いだす…

だが…

ルキナ「ああああああああっ!？」



ビクビクと脈打ち大量に射精された精液…
ルキナは叫び続け…そしてぐったりとそのまま意識を失っていった

あまりの快樂に体が耐え切れなかった

シャロン「うふふ、これで英雄さんたちは私たちの仲間ですね…
さあ、召喚士様！すぐにあなたを見つけてみせますよ！！」

…

3章

マルス「ようやく街に着いたね、みんなお疲れ様。」

大きな門の前で振り返り背後の英雄たちに声をかけたマルス

その視線の先には

物静かに佇む美しい少女「イドゥン」

一見すると美しい少女にしか見えないが
その正体は世界を揺るがすほどの力を持つ魔竜

今の彼女はその力の大部分が封印されているらしく
魔竜の片鱗は見せることはない

その力が暴走することを恐れ、
ファルシオンを持つ英雄王マルスが
彼女と同行する役目を引き受けた

そしてもう一人が、ヘル王国の王女「エイル」

こちらもイドゥンに劣らない美女であり
豊かな乳房をゆさゆさと揺らして歩いていた

ヘル王国については謎が多く同じ世界の王女であるシャロン
でも詳しいことは語れなかった
またエイル自身も口数が少なく多くを語ろうともしなかったので
町までの旅路は非常に気まずい雰囲気が続いていた

マルス「二人とも疲れたただろ？…疲れてないのかな…？」

エイルとイドゥンはあまり表情を変えずゆっくりと頷いた

マルス「…これから町に偵察に入るけど、
目立つわけにはいけないのでこれを被って
旅人を装っていこうと思う。」

マルスは二人にみすぼらしいローブを手渡した

マルス「イドゥンは既にローブを羽織っているけど、
ずいぶん綺麗で高級そうだからね、
念のためにこっちに着替えておいて。」

イドゥン「わかったわ…。」

エイル「……。」

警戒されているのかな…もしかしたら嫌われてる…？
そう考え込んでしまったマルスだが
決して彼女たちはマルスの事を避けているわけではなかった

突然、異界へと召喚され…
肝心の召喚士は死亡していたという…
状況では不安になるのも無理はない

しかもこの世界には謎の女神により破滅へと向かっているという…

マルス「無理もないよね…僕だっているいろいろ不安はある…。」

マルスは自分と共に戦った友人たちのことを思い浮かべる
シーダやチキたちはこの異界で無事にいるだろうか
皆の事を想うといつの間にか二人のように口数が少なくなってしまう

町の入り口には女神の配下…

信者とも思える武装した兵士たちが警戒していたが…

マルスたちは特に怪しまれることもなく通過することができた

特務機関が崩壊し

既に女神たちがこの異界を手中に収めている現状では
警戒する相手もないのかもしれない…

マルス「ひとまず僕たちは宿をとって…あれは…チキ？」

目の端に映った一人の少女の影

その姿がかってマルスと共に戦った神竜の少女「チキ」に見えた

マルス「……見間違いか…

想った以上に僕は疲れているのかもしれないな…。」

イドゥン「マルス…無理をしないほうがいい。」

エイル「マルス様だけではありません…、

の町の人々はどこか…病に侵されているようにも見えます。」

一見すると町は平穏で人々は不自由なく暮らしているように見える…

だが、何かを警戒するように

巡回する女神信者らしき者たちや

何かに怯えたように人目を避ける女性たち…

この町が異常であることは間違いなかった

マルス「ふう、ひとまず体を休めるとしよう…。」

町のはずれ…もっとも目立たず安い宿の一室を借りた一行
軋むベッドへと腰を下ろし、旅の疲れを少しでも癒しておこうとする…

だが…

マルス「ごめんね、二人とも…
まさか部屋が他に空いてないとは思わなくて…。」

マルスと対面してベッドへと座るイドゥンとエイル

エイル「いえ、仕方ありません…部屋が空いていないのですから…。」

イドゥン「そうですね…マルス様なら安心です…。」

服の上からもよく解る…
隠されていても揺れるイドゥンの豊満な乳房…

そして隠すことなく堂々と晒されたエイルの胸の谷間…
シーダやチキとは違う…もっと成熟した女の魅力を持つ美女二人…
じっと無言のままマルス見つめるその瞳…
見つめているだけで吸い込まれそうになる…そんな気になってしまう

イドゥン「マルス様…そんなじっと見つめないで…。」

エイル「す…少し恥ずかしいです。」

マルス「ああ！ごめんなさいっ！！」

英雄王といえど一人の男…将来を誓った女性がいるとはいえ
美女たちと1つの部屋にいればこういう雰囲気にもなる

マルス「ああ、シーダごめん…
僕は今ほんの少しだけ…
おかしなことを考えてしまったかもしれない…。」

ぶつぶつと一人で後悔の言葉をつぶやき始めるマルス

目の前にいるイドゥンとエイルは非常に困った表情をしていた

男性がこんなに自分を責めている時…
どう言葉をかけていいかわからない…

エイル「あっ…あのマルス…さま…あのっ…。」

イドゥン「たぶん大丈夫…今は一人にしてあげたほうがいいかも…。」

そう言うとイドゥンはエイルの手を取り部屋から連れ出した

エイル「大丈夫でしょうか…
一人のしてしまうのは…危険かと思いますが。」

イドゥン「マルス様は英雄王よ、
どんな相手でも打ち勝てる力をもっている…はず…。」

エイル「そうですよね…私たちとは違います…。」

イドゥンとエイルはひとまず宿の隣にある酒場へと足を踏み入れる…

酒場の中は賑わいエイルたちが入ってきたことに誰も気づいていない
無言で空いている隅の席へと座り…

じっと客たちの会話を聞き取ろうとする…

どこか影の薄い彼女たちの隠れた才能が発揮されていた

「そういえば…また今日もやるんだってな…？」

「ああ、仲間をおびき出すための罠って噂だな…。」

「まあ、俺たちは楽しめるし文句はないんだが…。」

「今日はたしか…カムイ様が来るとか…。」

「マジかっ！？ 王女様が来るなら
早く広場に行って良い場所取っておかないとなっ！」

カムイ王女の名を聞き、
テンションを上げて酒場を飛び出していった男たち…

カムイの名を聞いたエイルとイドゥンも…
顔を合わせて頷き合い
男たちの後を追って酒場を飛び出した

エイル「マルス様にも知らせたほうが良いでしょうか…？」

イドゥン「これだけ騒ぎになっていれば…気付くと思うけど。」

町の広場へと続々と集まってくる男たち…
エイルとイドゥンは女性だと目立ちすぎると判断し
広場の見える路地へと身を隠し成り行きを待った…

しばらくして…広場に歓声が響き渡る

二人が広場のほうを見つめると…そこには

エイル「あれはカムイ王女ね…それと…。」

イドゥン「…ドラゴン？ 何がするつもり…？」

男たちに手を振り笑顔でドラゴンと共に現れたカムイ王女

そのドラゴンとは親しく触れ合い

まるで長年のパートナーであるかのように頬を摺り寄せていた

カムイ「ふふ、いい子ね…

今日も私たちの愛を皆さんに見てもらいましょう！」

そう言うと、カムイ王女は自ら服を脱ぎ豊満な乳房を

男たちの前で見せつけ胸を張ってポーズを決める…

その抜群のスタイルの良さに男たちは興奮…

さらにカムイ王女は下着まで脱ぎ捨てると男たちの前へと近づき、

手を伸ばしてきた男たちを笑顔で迎え入れた

カムイ「ああっ、みなさん優しく触ってくださいねっ！」

男たちに乳房を揉まれ体を撫でまわされ

嬉しそうに笑みを浮かべるカムイ王女

何人もの男たちと口づけを交わし

尻を撫でまわされ秘部を愛撫される

時間にして十分ほど…

男たちとの交流を終えたカムイがドラゴンの元へと戻ってきた

全身汗ばみ、秘部からは愛液が溢れ息が荒くなったカムイを見て
ドラゴンは激しく興奮し肉棒を反り立たせていた

カムイ「さあ、次はあなたの番…。」

カムイは尻を突き出しドラゴンへと向ける…
ドラゴンは慣れた様子でカムイの両足を抱え肉棒を
カムイの秘部へと押し当てた

カムイ「あはあぁっ！すごい…やっぱりこの子が一番っ…！」



激しく揺さぶられる乳房…

肉棒が奥深くまで膣内へと入り込み…勢いよく飛び出す…

その度に愛液が吹きだしカムイは大きく叫ぶ

その光景を見ていたイドゥンとエイル

無表情の彼女たちも目を見開き驚きを隠せない様子だった

エイル「カムイ王女…ああいう…性癖がおありだとは…。」

イドゥン「カムイ王女…竜族…のようね、ドラゴンも…

嫌がっているどころか楽しんでいる…。」

その状況に頭を抱え込むイドゥン…

エイル「大丈夫ですか…イドゥン様…？」

イドゥン「ええ…なんだか複雑な気持ち…。」

イドゥンは過去の自分を思い返してしまう…

カムイ「あはああああんっ!？」

大量の潮を噴き上げたカムイ…

周囲の男たちから歓声が上がり場は盛り上がり続ける

カムイ「さあ、皆さん見てっ…私とドラゴンの間にも…

愛が芽生えました！種族なんて関係ありません…

女神様は種族を超えて愛を深めることを望んでおられます！」

ドラゴンと交尾しながら…女神の教えを説きだすカムイ

エイルとイドゥンはその言葉に啞然としてしまうが

広場にいた男たち…少数だが女性もいるようだが

誰もがその言葉を称えているようであった

そして…カムイの膣内へと射精される大量の精液

カムイ「あああっ、私の中に…ドラゴンの精液が出ています…！
ああ、もっと出してっ…私を孕ませてっ！」



ドラゴンの精液で腹部がぼっこりと妊婦のように膨らんだカムイ
肉棒が引き抜かれると大量の精液が膣内から溢れ出した
カムイ「あはあああっあああっ!？」

ぐったりと疲れ切った様子のカムイ…だが
ふらふらとしながらもゆっくりと立ち上がると

カムイ「はあ…はあ…やはりあなたとの交尾が一番気持ちいいですね。」

笑顔でドラゴンの頭を撫でていた
ドラゴンも気持ちよさそうに喉を鳴らし目を閉じている

カムイ「それでわ…あなたとあなた…。」

カムイは集まっていた群衆の中から十人ほどの男を指名すると…
その男たちを連れて全裸のまま歩き出した…

カムイ「皆さん楽しみましょうね…！」

選ばれた男たちはテンション爆上げでカムイ王女の後へと続く

選ばれた男たちは今夜…
カムイ王女の相手をするために選ばれた者たち…
満足気に男たちを連れて歩くカムイ王女…は
ゆっくりとエイルとイドゥンが潜む路地の横を通りかかり

カムイ「……うふふ。」

二人の顔を見て笑いかけ…男たちと立ち去って行った

イドゥン「気付かれていた…のね…。」

エイル「カムイ王女…まるで別人のよう…
すぐにマルス様に知らせたほうが…？」

イドゥン「ええ…そうしましょう…。」

…

時は少し遡り…

イドゥンとエイルが広場へと向かっていた頃

宿の部屋で独り自責の念に駆られていたマルスは
部屋の扉をニックする音を聞き正気に戻る

マルス「はっ…ああ、僕は余計な事を考えてしまっていたおうだ…。
そういえば…二人はどこにいったんだろう…
気を使わせてしまたかもしれないな。」

マルスは立ち上がりエイルとイドゥンに申し訳なく思った

そしてノックされた扉へと向かい…警戒し

マルス「誰だっ？」

???「もしかして…本当にマルスお兄ちゃんなの？」

マルス「その声…まさかっ!？」

マルスは覚えのあるその声を聞きすぐに扉を開いた

そこには…

良く知った一人の少女の姿があった

マルス「チキ…無事だったんだねっ！」

闇墜ちチキ「お兄ちゃんっ！」

勢いよく抱き着いてきたチキを優しく迎え入れるマルス

しっかりと抱き合い再会を喜び合う二人…

そしてマルスはゆっくりと口を開いた

マルス「チキ…いろいろと話を聞かせてくれないか？」

闇墜ちチキ「うん…わかった。」

…

マルス「つまり…女神は異種族との交配を進めている…と？」

闇墜ちチキ「そう、いろいろな種族同士が差別なく
愛し合う世界を作ろうとしているみたい。」

マルス「それは、素敵な世界…なのかな？
いや、強引に進めるのであれば…危険な考えと言える…。」

闇墜ちチキ「でも強引に進めないと
そんな世界は創れないかもしれないよ？」

マルス「そうかも…しれないけど
人々を強制的に交配に利用しているのであれば…
それは許されない行為だよ、
英雄達だってそれに反対して戦ったんだらう？」

闇墜ちチキ「う～ん、
喜んで参加している英雄さんもたくさんいるみたいだよ？」

マルス「えっ…そんな英雄もいるの…？
いや、英雄と言っても個性が強いからなあ…
そういう考えの英雄がいてもおかしくないの…かな。」

一人ベッドに腰かけ悩み出すマルス…
英雄達ならば世界を救うために
無条件に協力してくれると思っ込んでいたが、
そんな英雄たちがいるのならば…
中には敵対してくる者たちが間違いなくいるだろう

英雄同士での争いは出来る限り避けたい…
女神との戦いは間違いなく過酷なものとなるだろう

少しでも仲間を多く集め強大な敵に挑む…

マルス「ふふっ、何だか昔を思い出すな…。
ところで…チキは一人で来たのかい？
他の英雄たちの場所に心当たりはあったりする？」

闇墜ちチキ「カムイお姉ちゃんと一緒に来たよ。
近くだと…王都にフィヨルムお姉ちゃん達がいるかな。」

マルス「カムイ王女にフィヨルム王女か…
王族を助け出せれば配下の英雄達も協力的になるかもしれないね…
カムイ王女はどこに？」

闇墜ちチキ「今日は…たぶん会えないと思うよ。
明日になれば向こうから会いに来てくれるはず！」

マルス「えっ…会いに来るって大丈夫なのかな
カムイ王女が危険なんじゃ？」

カムイ王女の身を案じるマルスだったが
チキはマルスの膝の上で緊張感なく座っていた

チキによると何も心配はいらないらしく
マルス達が行動するほうが危険が大きくなるらしい

マルス「わかった…チキを信じるよ。」

闇墜ちチキ「うん、信じて！

お兄ちゃんも疲れているみたいだから今は休んだほうがいいよ。」

マルス「そうだね…二人が戻ってくるまで…

少し休ませてもらおうかな…。」

チキと出会えて安心したのか急に眠気に襲われるマルス

そのままベッドへと横になり…

重くなったまぶたを下ろし深い眠りについた

…

マルス「う…うん…なんだ…体が重いっ…！？」

下半身に感じる重さを感じ目を覚ましたマルス

その目に飛び込んできたのは…

服を脱ぎ小振りな乳房を丸出しにして

マルスに跨ったチキの姿であった…

闇墜ちチキ「…あっ…もう起きちゃったの…

もっと悪戯したかったのに…。」

マルス「チキ…うっ、なにっ…！？」

チキが腰を振って気付かされた…

自分も下半身を丸出しにしており

その肉棒がチキの膣内へと挿入され繋がっていることに



マルス「うわああああっ！チキ何をしているんだ！？」

闇墜ちチキ「なにって…マルスお兄ちゃんと子作りしてるんだよ？」

マルス「平然と何を言っているんだ！
すぐに…その動きをやめて…うっ…！？」

チキの激しい腰使いに悶えるマルス…

闇墜ちチキ「やめないよ…

マルスお兄ちゃんだって気持ちよさそうにしてるじゃないっ！」

その巧みな腰使いに抵抗することができないマルス
シーダと結ばれた時以上の…凄まじい快樂が押し寄せていた

マルス「なんで…この感覚は！？

チキ、一体僕に何をしたんだ！」

闇墜ちチキ「気持ちよすぎるってこと？

それは女神様の力らしいよ…

みんな気持ちよくなれば交配が進みやすいつて言ってた。」

その言葉を聞いてマルスは愕然とした…

気づかないうちに女神の力が自分の体にまで及んでいたこと
そして、目の前にいるチキが既に女神に魅了され
その虜となっていることを…

闇墜ちチキ「もう抵抗しても無駄だよ…？

私の腰使いで墮とせなかった人はいないんだからっ！

お兄ちゃんはまだ私のものなのっ！」

マルス「そんな…こんなことがっ…うっ、ダメだチキ…

このままじゃ僕はっ…！」

闇墜ちチキ「いいんだよお兄ちゃんっ！私の中に…出してええっ！！」



ふああああああっ!!
お兄ちゃんの精液が中に…出てるっ
ううっ…もっともっともっとして
私を孕ませてっ!

チキが与える快樂に耐えきれず…射精してしまったマルス
想像を超える大量の精液がチキの膈内へと溢れていった

マルス「はあ…はあ…こ…こんなこといけない…。」

闇墜ちチキ「もう手遅れ…

お兄ちゃんは抱いた女の子を見捨てることができるの？」

マルス「…うっ…ぐっ…これは不可抗力で…。」

闇墜ちチキ「そんなの言い訳にならないよ？
私が妊娠しちゃったらどうする？」

マルス「うっ…頭が…混乱してきたよ…。」

闇墜ちチキ「じゃあ、今は何も考えないで…もう一回しよう！」

マルス「チキ…これ以上は…うあああっ!？」

チキの攻めに喘ぐマルス…
マルスの上でチキは邪悪な笑みを浮かべていた

…

マルスにカムイ王女の件を伝えようと走るエイルとイドウン…だが

カムイ「どうして逃げるんですか？
せっかく準備を整えたんですよイドウンさん？」

行く手を遮るようにカムイ王女と男たちが立ち塞がった

イドウン「そこを通して…。」

カムイ「あれ？やっぱり…イドウンさん…
私の知っているイドウンさんとは別人なんですね？
女神様たちが言っていた召喚さればかりの英雄さんでしょう？」

エイル「……。」

イドウン「……。」

カムイの言葉に警戒する二人…

カムイ「そんなに警戒しないでくださいよ、大丈夫です！
同じイドウンさんなら必ず気に入って頂けますから！」

カムイはイドゥンたちの背後を見つめた…

二人が振り返ると…そこには巨大なノスフェラトゥの姿があり
イドゥンの体へと手を伸ばして…拘束してきた

イドゥン「きゃああっ!？」

エイル「イドゥン様っ!？」

カムイ「そちらの方は…エイルさんでしたか？
女神様から聞いていますが、私はお会いしたことは無いですよ
エイルさんにはどんな相手が相応しいか…
色々な種族の方と交わってもらおうと思います！」

エイル「いろいろな種族と…交わる…？」

カムイ「はい、きっと気に入って頂けると思います！
さあ、ご案内してください！」

エイル「ひいっ…いやああっ!？」

イドゥン「きゃああああっ!？」

現れた男たちに連れていかれるエイル…

そしてイドゥンは…その場で服を引き裂かれ
白い肌と豊満な乳房を晒された

イドゥン「うっ…あっ…!？」

ノスフェラトゥに抱えられ男たちに見世物にされるイドゥン
露わになった乳房…

そして今ノスフェラトゥに剥ぎ取られた下着の下から
秘部が露出する

男たちはその美しい体に見惚れて呆然としていた

だがそんな美しいイドゥンの秘部へと
ノスフェラトゥの肉棒が押し当てられる

イドウン「いやっ…こんなの入らないっ…!？」

極太の肉棒を目にして恐怖で震えだすイドウン

その様子に興奮した男たちはより興奮し大声で叫ぶ

イドウン「うっ…あぐっっ…!!!??？」

愛液でぐっしよりと濡れた秘部に

亀頭が膣穴を押し広げゆっくりと入り込んでいく…



イドゥン「あがっ…ああああっ!？」

極太の肉棒は最深部まで挿入された
激しい苦痛と腹部への圧迫感に表情を歪めるイドゥン
ノスフェラトゥはイドゥンの体を激しく揺さぶる

イドゥン「ああああっ!？　ああああああああ!!」

ただ叫び続けるイドゥン…
目の前では群衆が犯される自分の姿を
いやらしい視線で見つめている
耐えがたい屈辱であった
だが…そんな群衆の前でイドゥンは激しく潮を噴き上げ
激しく体を痙攣させた…

イドゥン「あっ…あはああああっ…!？
なんで…どうして私の体は…こんな敏感にっ!？」

自分でも理解できないほどに敏感になっている体

ノスフェラトゥが触れるだけで全身に電気が走り
体が熱くなり高まる性欲を抑えきれなくなっていく…

イドゥン「私…いったいどうしちゃったの…。」

いつの間にか自分を見つめる男たちの視線が
気にならなくなっていた

イドゥン「あはああああっ…ああああっああっ!??」

極太の肉棒が激しく子宮を押し上げ悶えるイドゥン
群衆の前で喘ぎ何度も潮を噴き上げる

ノスフェラトゥもそれに応えるようにさらに激しい腰使いで
イドゥンを攻め続ける

イドウン「あああああああああっ!？」

叫びとともに大量に射精されたノスフェラトゥの精液
白目を向き全身を痙攣させるイドウン
魔竜さえもその限界を超えた快楽に耐え切れなかった



放心したままノスフェラトゥに抱えられたイドゥン…

カムイ「うふふ、はじめての交尾なのに激しすぎたようですね…。」

笑みを浮かべて放心するイドゥンを見つめるカムイ…

そして…

カムイはイドゥンを連れ男たちと共に歩き出す

カムイ「次は…エイルさんですね…

どんなプレイがお好きなんでしょうか…？」

…

地下牢の中でエイルは一人呆然としていた

薄暗い地下…死の匂いが漂う空間…

それはかつての彼女の故郷にどこか似ている気がする

エイル「私はこれから…どうなるのでしょうか…。」

これからの自分の置かれる境遇を考えるエイル

しかし…どんな扱いを受けようとも

依然の生活よりはマシなのかもしれない…

そう考えていたエイルの前の前の扉が…ゆっくりと開いた

エイル「……………ひいつ…！？」

前の前に現れたのは巨大な獣…

ガリア王国のレテと同族のラグズ…

しかし…その様子に理性はなくただ狂暴な…

溢れんばかりの性欲を持つ野獣であった

カムイ「エイルさんお待ちせしました！
まずはこの子との相性を見てみましょう、
私もお気に入りの子なのできつとエイルさんとも
相性良いと思いますよ。」

エイル「そ…そんな…っ…！？」

目の前にある鋭い牙を前に恐怖しかないエイル
震える体を必死に起こし逃げ出そうとした時…

エイル「きゃああああっ！？」

ラグズは背後からエイルに覆いかぶさるように密着…
大きく勃起していた肉棒をエイルの尻へと擦り付け始めた

エイル「あああっ！？」

カムイ「ああ、まだ下着を履いたままでしたか…
でわ、私がちょっとお手伝いしましょう…。」

カムイは檻の中へと入るとエイルへと近寄り
エイルの下着をすっと…下ろした

エイル「いやあっ…カムイ様…やめてくださいっ！？」

ラグズの肉棒を…露わになった秘部へと
押し当てるように誘導するカムイ…

エイル「あっ…あはああああっ！？」

カムイ「ああ、エイルさんは処女でしたね…
こらもっと優しくしてあげないとダメですよ！」



あっ…ああっ…
こんな 獣が私の中に…
ああああんっ!?!
奥まで…入ってきてますっ!?!

大きな乳房を揺らし悶えるエイル…
申し掛かられたエイルは逃げ出すこともできず
全身に力を込めて必死に交尾に耐え続ける…

エイル「あはっ…体が…熱いですっ…
なんでこんなに、気持ちいいのでしょうかっ…！」

カムイ「あれ？もしかしたらエイルさん…
ラグズとの相性が抜群かもしれませんね？」

エイル「そ…そんな…私はっ！？」

そんなはずはない…

だが胸が高鳴り膣内を貫く肉棒の刺激が気持ちよくて堪らない

快樂と無念の生活を送ってきたエイルにとって
この快樂は刺激があまりにも強すぎた…

エイル「あああっ！？ ダメ…体がっ…出ちゃいますっ！？」

大粒の涙を流しながら…エイルは絶頂を迎え大量の潮を噴き上げた

叫び続け悶え続けるエイル

そんなエイルの膣内へと射精される精液…

さらなる快樂が訪れエイルは全身をガクガクと震わせ…
ぐったりと倒れ込んでしまった



精液を垂れ流しながら床でぴくぴくと震えるエイル

その姿を見ていたカムイは満足気な笑みを浮かべ

カムイ「エイルさんとは良いお友達になれそうですね…。
あんっ…もうまだ交尾したいんですか…？
仕方ありませんね…さあ、どうぞ…。」

カムイへと擦り寄るラグズ…
尻を向けその肉棒を受け入れる…

エイルの隣で快楽に喘ぎだすカムイ…

一人の英雄がまた墮落していった…

…

4章

シャロン「私って英雄になったはずなのに…。」

森の中でオークに弄ばれたシャロンは
その後も散々な目に合い続けた

ゴブリン達の住処へと連れ込まれ
他の英雄達と共に犯され続け身も心も傷ついた…はずだった

シャロン「自分でも不思議です…
なんでこんなに気持ち晴れ晴れとしているんでしょうか…？
私って実はすごい変態なんでしょうか？」

魔物たちに弄ばれ興奮し
より快楽を求めてしまった時の自分を思い出すシャロン

王都へと向かう護送馬車の中で…
装備を奪われほぼ下着だけの姿となったまま
いつの間にか自慰に夢中になっていた

同じ檻の中には同じように
性欲を我慢しきれない英雄達の姿があったが…
誰も気にしていない様子だ

ロキ「さあ、よく来たわねん！
もうじき式が始まるわよっ！」

護送されたシャロン達が連れてこられたのは…
王都にある最も大きな教会…

シャロン「ロキっ！？あなたが黒幕ですねっ！」

胸を張りロキを指さすシャロン

ロキ「残念はずれっ！
私は女神様たちのお手伝いをしているだけよん…うふふ！」

楽しそうに笑うロキ…
その笑顔の奥に潜む邪悪な本性は見通すことはできない

シャロン「…むむむっ！この異界でも相変わらずですね…
それに…式ってなんですか…私たちをどう辱める気ですか！？」

ロキ「もちろん結婚式のことよん！
英雄達がパートナーと結ばれるから
あなた達も祝福してあげてねん！」

シャロン「結婚式に捕虜の私たちを呼ぶって…
友達いないんですか？どれだけ祝福されていないんですか…
ちょっと気の毒になってきました。」

ロキ「ちょっと誤解しないでっ！
女神様たちはこの世界に来たばかりのあなたたちに
種族を超えた愛のすばらしさを説こうとしているのよん！
呼ぼうと思えば大勢呼べるんだからね！！」

ロキと言い争うシャロンの背後ではルキナやイドゥン達が
下着だけの装備でもぞもぞと体をくねらせている
恥ずかしさと同時に、
この数日間で魔物たちに散々調教された結果
性欲を抑えることができない体にされてしまった

この異界では女神たちにより様々な種族が召喚され…
様々な形で交配が試されている様子…
結婚式というのも…普通の式で終わるとは思えない

教会の中はシャロンが知っている内装とほぼ変わっていない
ようだった
その中心には3人の花嫁衣裳に身を包んだ美しき英雄たち…

フィヨルム シグルーン ルイーズの3人が立っていた

フィヨルムの隣には大男…ずいぶん年の差があるように見える

シグルーンの隣にはおそらくラグズの男…二人

そしてルイーズの周囲には…何人もの屍兵が立っていた

一妻多夫なのだろうか…

シャロン達もその光景を前に目を丸くしていた

ユンヌ「よく来てくれたわね、新たな英雄達…！」

ナーガ「あなたたちを歓迎しますよ。」

花嫁たちのさらに奥…そこには
女神ユンヌと…神竜ナーガが玉座のような椅子に座っていた

シャロン「女神ユンヌと神竜ナーガが…これは勝てないですね。」

あははと笑い出したシャロン…

敵は女神の名を語る邪悪な存在かと思っていたが、
目の前には本物の女神が鎮座している…
目を疑うような光景の連続
そして僅かな希望が消え去るような光景でもあった

ルキナ「な…なぜ女神様たちはこんなことを許しているのですか…？
こんなことを本当に望んでおられるのでしょうか？」

小振りな胸を必死に隠しながらルキナは
女神たちに疑問をぶつけた

ナーガ「もちろん、私たちが望み…認めています。」

ルキナ「な…なぜですかっ！？
異種族同士を交配させて…なにを求めているのですか！」

ユンヌ「もちろん種族間で差別がない世界だよ、
全ての種族が交われれば…きっと世界は平和に近づける。」

ナーガ「そんなことは夢物語だ…
馬鹿げていると私も最初は思っていました…
でも、あなたたち淫乱な英雄は
それを現実にする可能性を秘めています。」

ナーガとユンヌは英雄たちの血に秘められた力と
可能性について語り出した…

英雄達の血筋には既に他種族と交わり新たな種族として
誕生している者もいる…それは一つの奇跡であり
女神たちにとっては非常に興味深いことであった

ユンヌ「私のいた世界でも
ラグズとベオクが長い間争い続けていたわ…
でもそんな二つの種族の間でも愛が芽生え
新たな命が生まれた、だけど
その子供たちはどちらの種族からも受け入れられなかった…。」

ユンヌは本当に悲しそうに語っていた…
がその表情は一気に明るくなり

ユンヌ「だから私はナーガと相談して、
全ての種族が1つになれる世界を実現しようと決意したのよ！
アスタルテはまだこの異界に現れていないし…。」

ナーガ「その成果の1つが…この結婚式です。
この3人の英雄は種族を超えて結ばれることを決断してくれました。」

女神たちの前に並ぶフィヨルム達は本当に幸せそうに見える

ナーガ「さあ、みなさん…
新たな英雄の方々に種族を超えた愛を見せてあげるのです！」

「「はいっ！」」

フィヨルム シグルーン ルイーズの3人は力強く答えた

そして3人は周囲のパートナーたちと抱き合い激しく求めあう…

フィヨルム「あああ…早く中にくださいっ…！」

性欲を抑えられず顔を真っ赤に染めたフィヨルムは
自らドレスを捲りあげて尻を突き出した

フィヨルムのパートナー…
シャロンたちにはただのおっさんにしか見えないが、
人型になった魔物らしい…

フィヨルム「ふあああああっ!？」

下着を下ろされ秘部を激しく舐め回されると
すぐに肉棒を挿入させ激しいセックスが始まった



ああっ!!ああっ!!
気持ちいいですっ!!
もっ私を愛して…
孕ませてください!!

シグルーン「ああ、サナキさま申し訳ありません…
騎士としての役目より愛を選び…花嫁になる私をお許してください！」

ラグズの大男の上に跨り激しく腰を振るシグルーン…
さらにもう一人のラグズが背後から迫り尻穴へと肉棒を押し込み…
激しく腰を振る…

シグルーンのパートナー二人は親子であるらしく
息子のラグズはシグルーンのことをお母さんと呼んでいた



ルイーズ「ああ…すごいですわ…こんなにたくさんの殿方が…私の夫となってくれるなんて…！」

大きく豊満な乳房を揺らしながら肉棒で激しく突かれるルイーズ

左右から差し出される肉棒を舌を伸ばし美味そうにしゃぶり
屍兵たちに押し倒される



あああつ！
ああつ…もうそんな焦らないでっ
みなさん順番に…私の中に出して
私を孕ませてくださいねっ！
あああああ!?

カッカッ

ハッハッ

ハッハッ

まさに酒池肉林の光景…
そんな光景を見ていた英雄達は…
股間を抑えて座り込んでしまっていた

ロキ「女神様たち…御用意できましたわん！」

ナーガ「ありがとうロキ…。」

ユンヌ「じゃあ私たちも…。」

ナーガとユンヌの周囲にはロキが連れてきた人間の男たちが並ぶ…

ナーガ「英雄様たちだけには任せられないですから…
私たちも体を張って…実験に協力しているのですよ。」

啞然とする英雄たちに語り掛けるナーガ

女神たちも自らの体で様々な種族との交配を試してた…
人間 ラグズ ノスフェラトゥに始まり
異界の魔物ゴブリンやオーク…見たこともない怪物まで…

その完璧なスタイルで男たちを魅了し…
両足を開いて肉棒を受け入れる…

ナーガ「あああっ…やはり…いいものですね…！」



あああ…すごいっ！
こんなに気持ちよくされて…
私、もうセックスの虜にされてしまいます…
ああ、早く私の中に…
あなたたちの精液を出さない…！

ユンヌの周りにも男たちが並ぶ…
小柄のユンヌの前では周囲の男たちは皆大男に見える

ユンヌ「さあ、私を孕ませてみなさいっ！」



あはんっ! ああああつ!!
人間の... すごく太くて気持ちいいっ!
もっと激しくしてっ!
私をもっと気持ちよくさせて!

小振りな尻を突き出し男たちに見せつけるユンヌ

ユンヌ「あっ... はああああ太くて気持ちいいっ!!!!?」

式の間はより興奮を高めていった

フィヨルムやナーガたちのセックスを見るだけだった英雄達も我慢の限界であった

ロキ「あらん？シャロンさん達も限界みたいね…？
よかったら私が相手を用意してあげましょうか…？」

シャロン「うううっ…っ…！」

ルキナ「お…お願いします…私も気持ちよくして下さいっ！」

イドゥン「わ…わたしも…。」

リアーネ(私も…。)

次々に男を求めだす英雄達…そしてシャロンも

シャロン「ああっ、私にもお願いします！！」

ロキ「仕方ないわね…それじゃあ…
飛び切り元気な子を用意してあげるわんっ！」

ロキは予め準備してあったかのように
扉の奥から怪物たちを引き連れてきた…

ルキナはすぐに馬型の獣人の元へと駆け寄り
その肉棒にしゃぶりつき…

イドゥンとリアーネは
ノスフェラトゥに抱えられ奥の部屋へと連れていかれた…

シャロンとスー…ティトはゴブリンとオークに囲まれ
激しく体を揺さぶられ喘いでいる…

ユンヌ「見てナーガ…来たばかりの英雄達も…
仲良く愛し合っているわっ…！」

ナーガ「ええ、やはり私たちの考えは正しかった…！」

激しう求め合う英雄達を見て満足気な表情を浮かべ
張り合うように男たちと更に激しく求めあう

ユンヌ「あっ…あああっあつ…もう…イクっ…!？」

大量に潮を噴き上げ叫ぶユンヌと



ナーガ「ああああ…熱い精液が…私の中に…っ！！」

男に中出しされ悶えるナーガ…



さらに前進にぶっかけられていく精液…
ナーガとユンヌ…
そしてその場にいた英雄たちは精液に塗れ
うっとりとした表情で男…魔物たちに抱かれる…

ナーガ「さあ、新たな男たちをここへ…！」

ナーガの一言で扉の奥から様々な種族の男たちが姿を見せる
女神も英雄も…格差なく抱かれるその会場は熱気に満ちていた

ロキ「面白くなってきたわね…
召喚士を始末しちゃった時はどうしようかと思ったけど…
心配ない…うふふ。
きっとあの召喚士よりも強い子が生まれるわ…。」

自分の少し膨らんだ腹部をそっと撫でるロキ…
異界の地はより混乱を増していくことになる

END

ううっ…いやっ…やめてっ!
奥に入ってきてるよおっ…!!?



だめ……これ以上は……!
ああ……いや、おかしくなっちゃうっ?!

グッ
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ



いやあああつ!!
入ってききましたっ!!
私の中に…大きいのが…っ!

ズ
ッ

ズ
ッ

ズ
ッ






カキカキ

あがああああっ!!?
いや、中にたくさん出て…!!
ふあああ、気持ちいいよっ!!

カキカキ

カキカキ



いついやあああつ!
やめろっ…こんな!
痛っ…そんな激しくしないでくれっ!!

あはあああつ…!!
中に出てる…体が熱いっ…
私の体…どうしてこんなに…?





クッ クッ

クッ クッ

クッ クッ

いやっ、止めて…こんなことっ!!
魔物なんか犯されるなんてっ…
ああああああっ!!

うああああつ!!
あつ...ああ...
魔物の...精液が 私の
そんな...なん で 中に...?

アッ
アッ

アッ
アッ

アッ
アッ





ズ
ク
ッ

ズ
ク
ッ

んんっ!?!
すごい...なか...かき回されてるっ...!!
うっ...ああああんっ!

ズ
ク
ッ



ポ
ッ
ッ
ッ
ッ
ッ
ッ
ッ
ッ

ああああっ!!
イツちやうっ!!
もっともっくと激しくしてえっ!!

ア
ッ
ッ
ッ

(あっ…痛っ…!?)
こんな太いの無理ですっ!!
兄様…あああああっ!!

カッ

(あああああつ…
私…けがれてしまいました…
こんなに気持ちいいなんて…私…
どうしてしまったのでしょうか…?)

オシ

オシ

うっ…あぐっ…!?
なぜだ…私が…人間相手に
感じているのか?
ううあああああっ!?

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

ビ
ン



うあっつ!!
あああああっ!!
あぐっ...ああ...
だ...だめ...おかしくなっちゃうにやあ...

ドクッ

ドクッ

ドクッ

うあっ!!
ダメっ! そんな大きい物入りませんっ!
うっ... ああああ ああっ... いやあああ ああっ!
入って... きました... っ!!

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ





あああああつ!!
おなかか…中に…たくさん出てます!!
気持ちよくて…もう何も考えられませんっ…

あああんっ!?!
すごいっ! 激しいですよっ!
もっと私を気持ちよくしてくださいっ!!
あああああああっ!!





あああっ!?!
みなさん見てくださいますっ!
私の中にたくさん出ていますっ!
あああああっ...もっともっともっ!
いっばい出してくださいますっ!!

アッ
アッ

アッ
アッ

ううっ…
いやっ…こんな怪物に弄ばれるなんて…
私はっ…あ；あああああああっ!?





あつああああつ!!
イクっ...もうだめ...!!
お願い...もっと私の...中に...!!

あぁあ：
マルスお兄ちゃんと：
やっとなつになれたっ：
すごく大きいよ、私の奥まで
入ってきてるよっ！！





ふあああああつ!!
お兄ちゃんの精液が中に...出てるっ
ううっ...もっともっともっとして
私を孕ませてっ!

ゴッ

ゴッ



あっ…ああっ…
こんな 獣が私の中に…
ああああんっ!?!
奥まで…入ってきてますっ!?!



あがつ...あああああ!?
お腹の中にたくさん...出てる...!?
だめ...こんな感覚はじめて...
もう何も考えられない...

ドク
ドク
ドク

ドク
ドク

ドク
ドク

ビクビク

ああっ!! あああっ!!
気持ちいいですっ!!
もっと私を愛して...
孕ませてください!

ズ
チ
ズ

ズ
チ
ズ





カッ
カッ

ハッ
ハッ
ハッ
ハッ

ハッ
ハッ
ハッ
ハッ

あああつ！
ああつ…もうそんな焦らないでっ
みなさん順番に…私の中に出して
私を孕ませてくださいねっ！
あああああ!?



ビュッ

ズブッ

ズブッ

ズブッ

ズブッ

あああっ…!?
そんな同時になんてっ…
気持ちよすぎて…すぐにイってしまいます!!
サナキさま…申し訳ありません…
私は…こんな淫乱な女になってしまいました…!



あはんっ！あああつ！！
人間の…すごく太くて気持ちいいっ！
もっと激しくしてっ…
私をもっと気持ちよくさせて！

カッ

ズッ

ズッ

あああああつ!!
あああつ...あああつ...!!
ベオクとのセックスが
こんなに気持ちいいなんて...

ピ
ヤアアア



あああ…すごいっ！
こんなに気持ちよくされて…
私、もうセックスの虜にされてしまいます…
ああ、早く私の中に…
あなたたちの精液を出さない…！



カキカキ

ドクドク

ドクドク

あはあああああ！
いいわ…こんなにたくさん…
でもまだ足りない…もっと
もっと私の中に出しなさいっ！



















